春色連理梅巻之六

江戸　春亭　梅暮里谷峨作

第十一齣

人や来し柳乱るゝ宵の窓。外ゆかし覗き込もや
せんと。心尽も母の為。娘のお梅唯一人行燈の
灯を掻立て。縫る苦にならぬ衣あんじ。丸めく
[illegible]をのべしてちゞ。裂めを合して纏ふる袂

[illegible]

此寝毎夜ともにはじきつきき
夢のとこ見んりはしまの想をとめ
心のおびかみもおもても邊の書
まき想ひ語いつぞ一夜と君と空
しさめのさ罪深ふしとし業
依まのいゝ夢のあゝまいしるぐ
聴夜もりまく回りるまままく

男し既十六七の娘（むすめ）と申（まう）
もまし〳〵うらひの所（ところ）を
こんうけ金（かね）情（なさけ）あるきてしふ存（ぞんじ）
猶（なを）ふむやらや是（これ）ありしび
其（その）娘（むすめ）を引（ひき）まるまゐしつまく
様（さま）ふ見ぞつ付（つき）候（さうらう）のゝつぐ
しようし つゞきすゞりまく合

も気(き)の毒(どく)そふにてようつくし言付(いひつけ)を
ら内儀様(おかみさま)へ全(ぜん)さら何地(いづこ)の娘(むすめ)
なりしん御座(ござ)るやといふ承(うけたまはり)くぞ直(ぢき)
近所(きんじよ)のめれゝあの子(こ)をお梅(うめ)と
ミ母親(まゝおや)と媒人(なかうど)をゝしはしとけり
り愛(あい)そふずゝ目(め)をかけて遣(や)る
りゞゝしかへ毎日の様(やう)ず

こゝに再しき浮(うき)かれたるの
疝積(せんしやく)がとうり逆上(のぼせ)とゝりすまく
きゝ女の御膝(おんひざ)を一生(いつしやう)けん命(めい)
に喰付(くひつき)し歯(は)ぎしりするの
音(をと)までふりはこ耶(か)さめしくぞ
あら嬉(うれ)しさんとろ中腸(むまや)の面(うゐ)へくる
兄(こ)ん覚(おぼへ)居(そり)らすで此所(このあたり)すし

川獺よ字(あざ)まで子(こ)も[illegible]て御座(ござ)れ[illegible]
[illegible]便(びん)ふて大(おほ)名(めい)のふれて[illegible]の[illegible]金(きん)
ものを[illegible]て済(すみ)しかれけのと銭(ぜに)つゝ
[illegible]はまし〳〵なりけこの本(ほん)

扨「ヲヤ〳〵是(これ)まで茫然(ばうぜん)と[illegible]二世(おせ)かけて[illegible]

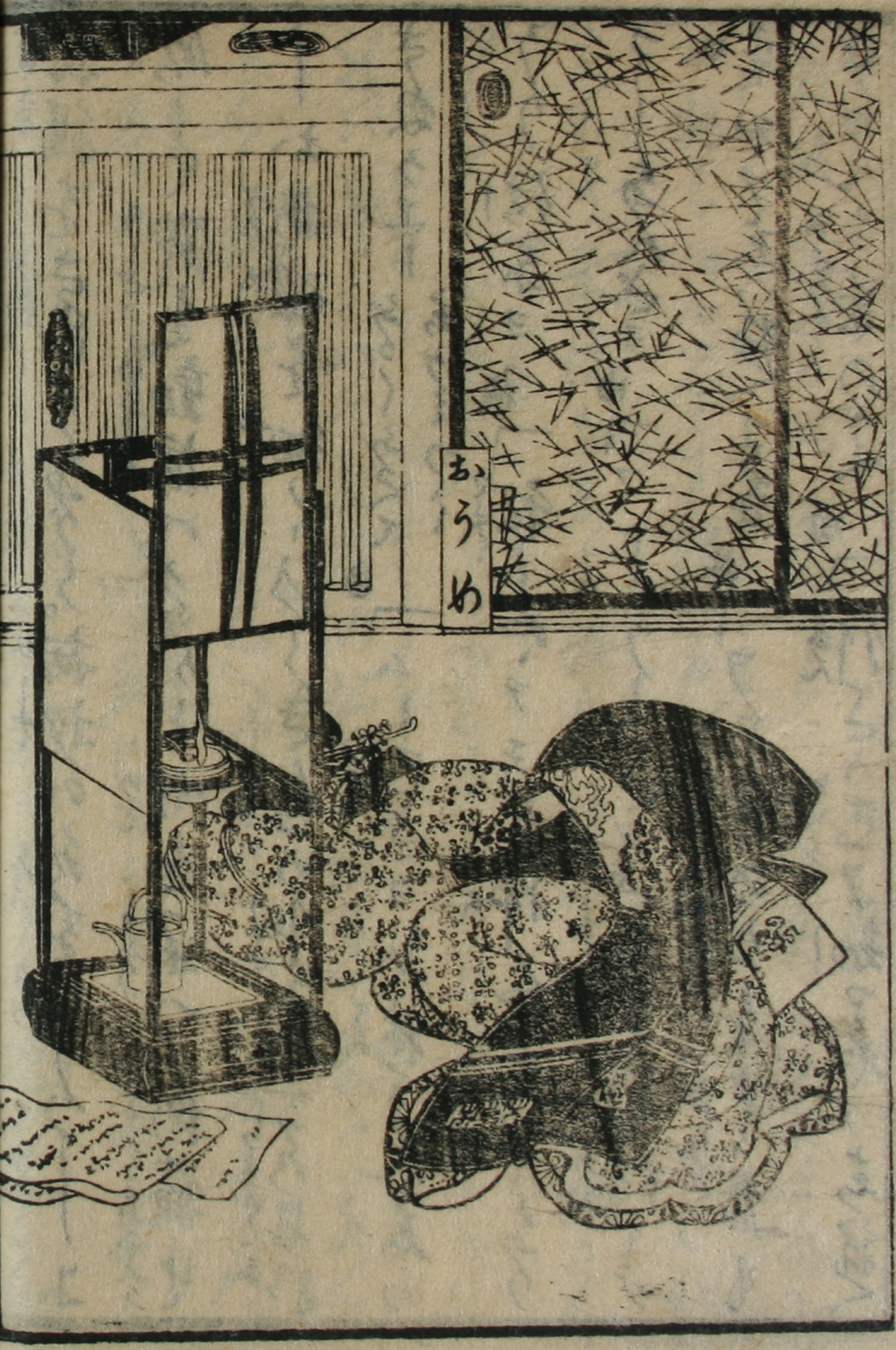
[illegible]と将来(しやうらい)を[illegible]ぞよろしく花魁(おいらん)のよくて

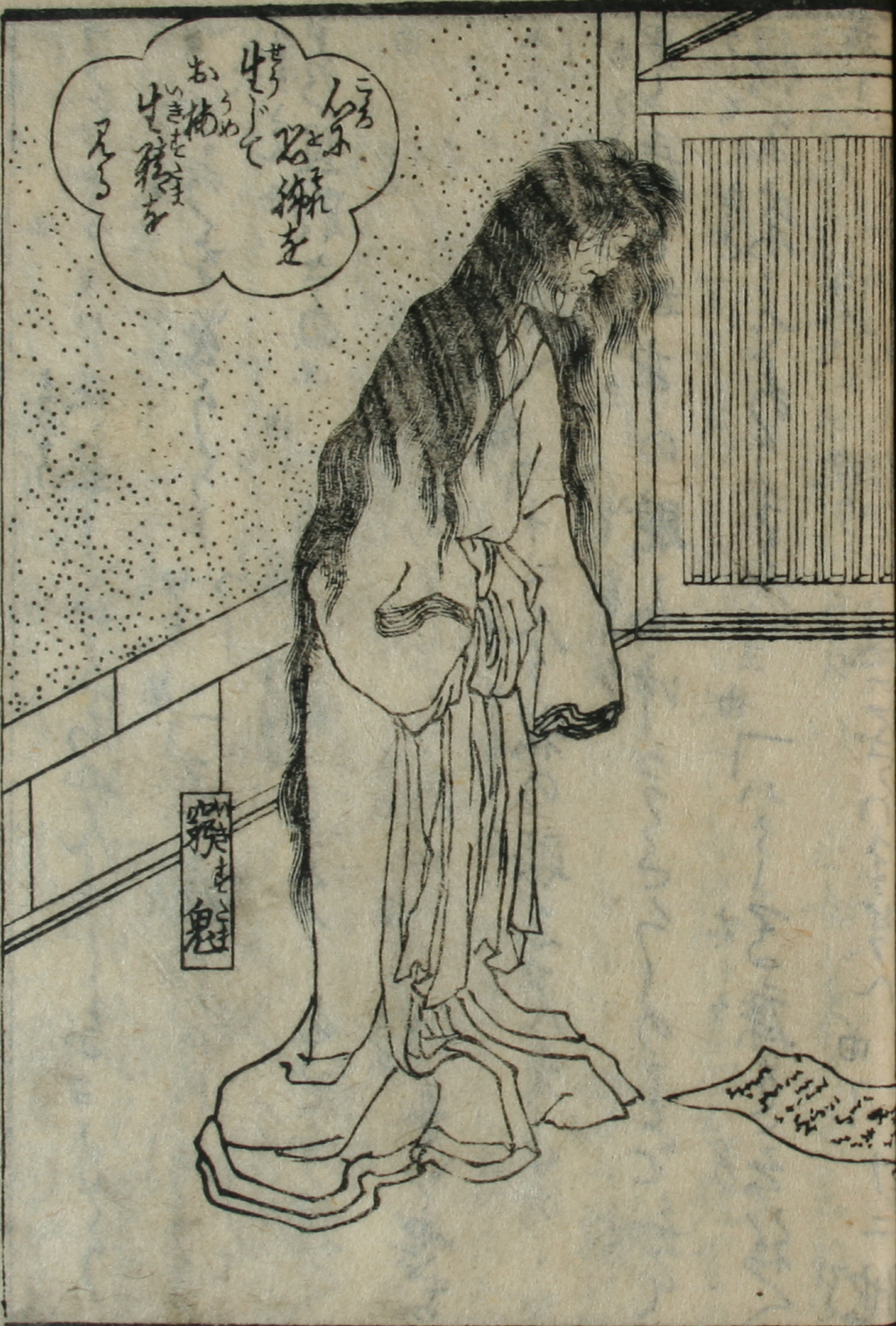
ござりまして私の手越参りまして見えまする[illegible]
さらりおそろしいアヽ源氏の阿古木の[illegible]
口からゆへ。いくものゝ淋しき海ちの宿。行とや
御家ござります。気味迎うて秋がまでも涙も
果さんで彼の恋を遂きまする涙に吐息つくらしき
の障子よきさらしくし行ら障子しも面常に閉じし
つくめ同じ。障子をそつと引開て「お梅さんといふ
声も。いとゞ哀満に咽びつけて長き黒髪ふり乱し

自殺なんぞる幽(ゆう)まへのぞもツくと立しありさまに。お梅(うめ)はてキヤツと玉消(たまぎる)一声(ひとこゑ)。仰反(のけぞり)倒(たふ)れて歯(は)をくひしばりけり。前後(ぜんご)もしらず息(いき)絶(たえ)ければ 由三郎(よしさぶらう)「お梅(うめ)さんヨイ〳〵お梅(うめ)さん〳〵トあせれどさらに気(き)も付(つか)ねばお驚(おどろき)ながら柄杓(ひしやく)の紹(ま)水(ゝ)汲(くみ)て気(き)付(つけ)ころなどをふくませ。抱起(だきおこ)し清〻息(いき)く吹(ふき)かけ 由「お梅(うめ)さアん引ト耳(みゝ)のねとふく〳〵呼声(よぶこゑ)のやう〳〵に通(つう)じてかウヽと唸(うな)く お梅(うめ)まぞべ。しつかりと抱(だき)しめる。

衿襦(むなさき)をさまりあげて。拗抄(ひやかし)の名(な)を呼(よ)ぶ

喉(のんど)して腮(うなじ)を動揺(ゆるがせ)べ。グツクと咽(のど)を通(とお)つ。酔藕(しようじゆくこれあらう)せしお梅(うめ)。眼(め)を細(ほそ)くひくき息(いき)の下(した)ふ 梅「アヽ気分(きぶん)がさめるヱト（ぶるくふるくて 気がつく）由「ムヽ己(おれ)ごヨ お梅(うめ)さん気(き)あり（くあり）仕方(しかた)ヨ 梅「私(わちき)しやアモウ御(ご)くつてしくありまし あんごヨ 由「ア、どうしてもシご幽(ゆう)霊(れい)でも行(いき)せ（ゆきせぬ）居(ゐ)やア気が揉(も)くてならね 梅「ヲヤ今(いま)の女(おんな)を笑(あざ)く君(あなた)も どうらんこ味(み)のうく 由「何(なん)ぼ己(おいら)アし知(し)アやア志ねへ


おうめ


心（こころ）ふと呂絲（それ）を生（せう）じてお物（うわ）生霊（いきすたま）を見る
猴鬼

コレサアモウ正氣（しやうき）しつちやんとしましヨめう
ト口（くち）にお心を[illegible]らうトつし 梅「アヽ嬉（うれ）しいト手（て）をうくして
[illegible]圓（ゑん）服（の）さなエ 由「エ 梅「私（わたくし）アどうしませうねへ
由「何（なに）を 梅「おゝ嬉（うれ）しウカしスも称（こと）れ 由「何（なに）をいふだら
つまらねへ 梅「十二今（いま）私（わたし）の眼（め）に見（み）えるこのゝ
[illegible]君とお中（なか）の睦（よ）い女中（ぢよちう）がくらしのことを知（し）つて
[illegible]ふ来（き）ませんでありますヨ 由「ハヽヽる康（むだ）を云（いひ）ねへ
梅「イエ何（なん）でも然（さう）いふの違（ちがひ）ござりません 由「十二他（ひと）

お客の顔に己が別に思ひありし女がありもなねく

りの 繪「ヲヤ是ハ大きに悦ばしいことでもあるゆへ北里の

乾娘らしいト見ゆる 由「あれは黄色のこぜうしさ南鐐の裁杯

さうハナ 若「イゝエ嬉しいお話しを聞ました私のことを案じなさんすな

こゝろでございますれのヲト いゝさして胸にギツクリと 由「、

あられどもそしらぬ顔

の愛に見えて居るか。然ら頼みて不心にも今の勤めが

ツレては不義で居るぜト きのふくあつかねて見てもちやうかしろとみえるぞ

以前の思ひをかくして顔をするあるぞ

お梅「キヤツト申し物にならり付。今の男の御存ぞ。

眼(め)もまたいさゝか根ぶかくして戯気で居(ゐ)るを悟し助ら
可笑(おか)しがりて　由「困(こま)る臆病(おくびやう)だく〳〵ワト
ゆうまのをひきロ　ラ
よほ本とうにて
勇昊(ゆうまい)は正整(せうとく)をてア能(よく)見んかヨト
いはれてお蝶(てふ)はにがく笑ながら
よく〳〵見まがへる美る心
あるひ誠の女(ゑんま)のうつるを本白(しろ)でんまでのうきね自役(じやく)あさる　お「ヲヤ〳〵ト　手(て)本
ちりめんのあびきもよくさうも着(ぎ)の衣裳(いしやう)なれば　とう
あげまげくさア勝(おく)しくしいよわ思(さかくん)を是(これ)を百てお驚(おどろ)きし
とみんて
あきらいましことだ子　由「アヽし一番(いちばん)くらう　蝶「一寸(ちよつと)竅(てう)い
どッちもアありませんめ子　私(わたし)もモウあし締(しめ)てとかありまし
てひとりで蝶本(まくら)も擘嘆(きこ)が遊(まう)激(ぜん)ぬなじて在(か)ってとてとて

おりましたゆへ悪魔(あくま)に魅(みいら)されるとみへしも気(き)がつき
ませんだつたヨ然して扨(さて)此(この)衣裳(いしやう)は如何(どう)も紫(むらさき)ので
ござります江 由「ハイこの衣裳(いしやう)は此頃(このごろ)池(いけ)の間(ま)木(き)に毎(まいごと)
ござりまして己(おのれ)の友(とも)どちが素襖(?)を取(と)りて此間(このま)木に付(つい)て悪(あく)
しこかざりひ不座(ざ)しれをうして置(や)る約(やく)束をしても
ざうして今(いま)衣裳(いしやう)つゞらごの諸模様(いろ〳〵もやう)を選(えらん)で
来(さ)のご 母「ヲヤ〳〵それはさぞ嬉(うれ)しうござりま
ませうゆへ器量(きりやう)がよくても出来(でき)ませんから 由「

来んせることもお目に来んせんせうと思つて家を抜て参る

のさアナ　扮「うゝくらゐの儀ヨ　由「実ヨをまてぐ

うゝ今夜衣裳のまゝで来んをさせてこのざまに眼を

まゐりして是非とも宜ふヨアかくし　扮「それでも実に

肝を潰しましたものヲ以前第一あきれまり私が気づかう

どうあさる　白「さうきとやア悪くて己も死ぬのヨ　扮「コト

勢圓ろ卫　由「あんで　扮「続して下さんせ渡さ

まゝまゝへ　嬉しどうして家をおし　由「ヨヤそやれやア何で

しばしをいやがるをたまらずおしつけてはおのれのふところへてをいれてはまださすり

ト 女をお縁の方へおくりひきあげ蚊帳せば通(かよ)ひける手合(てあい)がしらり

下女「此(こゝ)旦那(だんな)さまヱどふぞお客(きやく)さまが広間(ひろま)へ入ましてネ〳〵お迎(むかひ)に参(まい)りました

第十二齣

客(きやく)の帰(かへ)りしくはら其跡(そのあと)を片付(かたづけ)あがる 下女「今晩(こんばん)ハ更(ふけ)ましたと存(ぞん)じますれど大(だい)ぶの早(はや)くお休ミ遊(あそ)ばすしく御縁く 由「ウン是(これ)から又(また)北里(きた)の大茂(だいも)へ廻(まハ)って狂歌(きやうか)連(れん)を誘(さそ)ふヨ 下女「ヲヤ左様(さやう)でござりますかへヱ彼方(あなたさま)が会(くわい)を為(なさる)のでござりますかへ

由「然（さら）ば　下女「悪（わる）く御世会釈（おせかいしやく）をお教へなさりますこの人（このく）でござりますね　由「ムヽ三河町の初音園（はつねえん）を御贔屓（ごひいき）の人達は其（その）人（ん）で呉（くれ）ろと云て十時屋（ときあん）からも手代（てだい）を付（つけ）てよこしたとさ否（いや）とも云（いく）ねへ　下女「左様（さやう）でござりますれバどうでお暇（ひま）でらぬ一向（いつかうやい）在所へ参ても損（そんる）はお世話（せわ）なさい能（よく）来（なさん）てお出丈夫（ぢやうぶ）お用（よう）でござりますれバト揃（そろつて）ひも揃（そろ）て由ヽ助（よし）の囲（かこひ）に入て野郎（ろ）の　下女「毛頭（とうぞんじ）存じませぬ　そこが並もして居（ゐ）るところへあたぞしく来（さき）横山町（よこやまちやう）の丸旦那（まろだんな）がお息災（そくさい）で来ますと　由「十三坊（めさ）さんが見へ今（いゝ）時分（ぶん）ぞろへしに見つけて来（き）なさんだしら、此度（こゝ）へ通（かよ）しなさすナ　下女「え

まア一とふりの器量(きりやう)ごうへ合(らう)で一寸(ちよつと)お前(まへ)よりの見(み)よしの通人(つうじん)もきゝ

様(つけ)おどをかしい来(き)ちやアおわるうござりますがお内儀(かみ)へ揚(あが)りましてセイ〳〵つてゐらア

しきなさんへ 由「鏡(きやう)の今(いま)元(もと)や欲(よく)ハさア思(おも)ひも貸借(かしかり)へ人(ひと)だろの事(こと)

くりかへしてア何周(まゝよう)ごろ眞(ま)ことの中(うち)へ来(く)る仕様(しやう)がない仕方(しかた)ござくも

あちら〳〵お通(とほ)りなさいしと云(いつ)て連(つれ)て来(き)なさるヨ 下女「ハイ左様(さやう)

でござりますト いひながら廊(らう)やゞて次(つぎ)の間(ま)まで吉三郎(きちさぶらう) 由「サア

とうまきにもがやと由〳〵助も殘(ざん)えてなりし

女房(にようぼ)さん此方(こちら)へお出(で)なさんせ何(まゝ)が遠慮(えんりよ)なしに器量(きりやう)が出来(でき)なさるヨ

ト のくどもきこへぬ事(こと)もあれどもまだ由〳〵助ハふしんなるおもひあるゆへの事(こと)ならん

田舎娘(いなかむすめ)ながらも吉三郎(きちさぶらう)がことし年(とし)ごろだけども目(め)がんものなせうなり

ありて宮古路のも（りとぬうとおあひ）由「てア何よりも孝へお前丁度今も楽で言さ
ろう一彼進出ゆう何ごうか延へが道と知が縁振よかわろう
なかくね嫁ごうく気もと待付て在ってサト（ありつて居る所をさんざんきしてなかるも）
をまけをばうまどうくておかぢらけ
あれども頭巾をかぶりてわるさ 由「あんで房さん御存いそ涙くへ
どうでハア頭巾へ綿が出たよ ア、よしサア此方へお出よト
けまそうして 下女「フント 寒さ強しなつたものたまらん 田「ヲヤ
つまらくを 「クトつらみ由し由と言がつくて
頭巾も羽織も己のごく緑ごエく出椅子ようまりうア
一生涯ろくくケアるこゝ 由「先刻の送眼を出とうくしま

「ヲホヽヽ（ホヽヽ）下女「ヲホヽ萬国殿さまがまだめしにお膳を出さねへで

お泉とこ茶きてモウ〳〵すき腹くつてこたへられねへんだヨ　由「

慶してむかし吉備個して強盗に骨を折て歌とシだのダミヽ笑

正旅に来てかゝつて居る唐のまゝるとこのまを返歌ヨ　下女「

ヲホヽヽ（ホヽヽ）由「ドレ〳〵歌さまを貸に一段歳うお袖口一段

ころで見ずお　あ「ヲヤ〳〵そまじや私も驚きさま〳〵〳〵

う〳〵驚きされちんと感心ぢゃまあ〳〵まへでかく〳〵

私しやア聞合ませんよ　由「ハヽヽそりやアお花の婦お籏様

屋(や)の唐丸(とうまる)も鷽鳥(うそてう)籠もあるし又浅草(またあさくさ)のよふしの屋(や)の

い麒麟(きりん)もあるから様(やう)でござる　梅「ホヽ銭(ゑん)あつめ立(ころ)て進(あげ)ませう

由「大(ひど)く悪(ゑ)ふうける世態(きやう)して噲(ゐひ)き(る)地(ぢ)が強(きつ)てあるう〱

行(あん)でも噲(ゐひ)ゐので無(ね)く動(うご)く縁へ下品(げひん)な娘(むすめ)ぢゃヨノウ　下女「不(ふ)ミ

ヨホヽヽお梅(うめ)さんあんまりをおつしやらまして私(ぐはのぶん)衆の悪(わる)い

ニア繁(ざる)ッてお在(ざい)のことがありますものう　梅「イヽヱどうせ

器(まかずんる)真眼の悪(わる)にはふら〱かまいませんうくだすってあすんだヨ

すか職(ふくさ)網がおいぎいませんの　由「ムヽ己(おれ)が撰(さげ)て居(ゐ)るがポサア

あ「ハイト　おもちやを　ひきとらく　由「サア今よく歎しきノト　くすぐるを　キヤア〱と　あ「それはよせるもうづこよ彼から何か聞きしことゝ　由「アヽ宜めの拾つて　きれいなおけるを由も助ハ貞だぞくらりあげ　ヲヤ〱遠いハ有明のでおざいますヨト　しやんとしたるを　由「あんざおし屋ぞして　と俄雨が降のく順にしつましねくりのを大騒せる　あアドレ〱ヱヽと

上るり「西の尾花と女郎花みだるゝ[illegible]のまゝ

めづらしきにとてわが葉末に[illegible]宜の露も結ぶ　まぜて咲ものはまづの朝顔の[illegible]

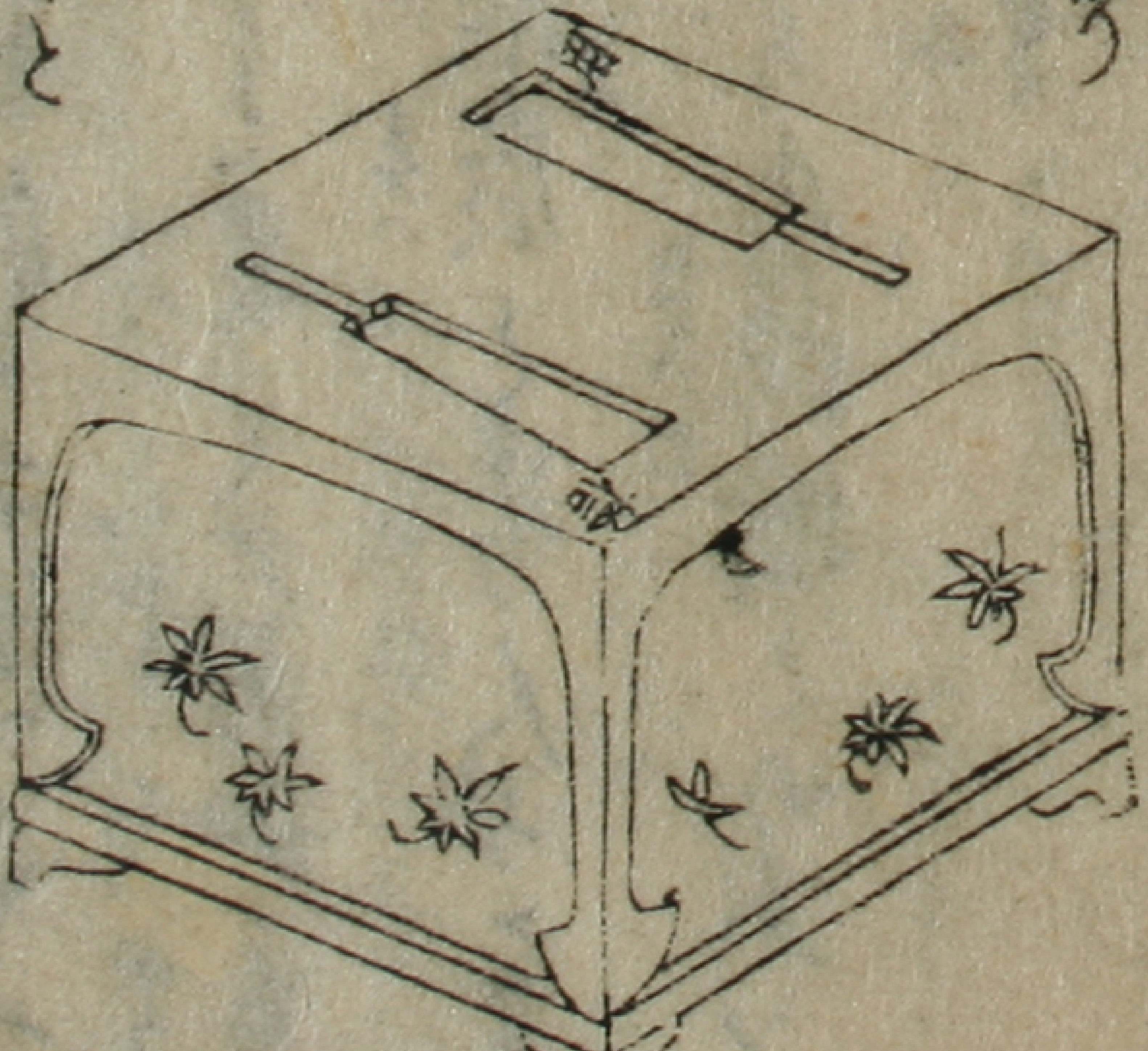
遊ぶ弟子の下合らしさも賤く決乱客さう
ドや〳〵はひいる

由「ムヽおめへやア梅暮里社中で作さのご此書の作者が
序を作さ小唄歌図会の初編みてへさッけ何処から
此様なのを写して来たのご　梅「それハ私の友達のお嫁
さんが書て呉ましたンでござりますヨ　由「然ろ。ミアさう
りくでお美ミ見んせるのがありやア再昨駿河ゟ黄
娘の方下しとッけ　下女「アノ羽根細へお遊びまへりらう

家にいる用捨箱は下に図しるごとく拵せるその上面に羽子板の形ちに似たる孔を彫ぬきたる左右に用捨の二字を記し箱の四方に散紅葉の蒔絵を画けり是ハ今の状さしといへるごとく時よりきこえ書状を入るものなりまた入用の手形ハ用の孔へ入るもよし不用ハ捨の孔へ入る也その箱の中に仕切板あるをもて用捨の名あり近年お劉深の

古柳亭種彦が随筆に用捨箱と題し〻冊是なり表にも に形ちを表せりこハ是もあることなるべくそのを近にある箱どもすでにあることもあれ大江戸の児女達に示そのゝ梅児爺がくどくとあらぼくもうあとなまかひぬひそ

うじひまかの蓋あけてたる所用捨箱　乙彦



由「ムヽ然也(さうじや)〳〵アノ是(これ)ハノお梅(うめ)さん駿河(するが)の府中(ふちう)といふ所(ところ)

山科(やましな)といふ豪家(ごうけ)の主人(だんな)が蘆阜(ろふ)と号て己(おのれ)の親友(しんゆう)

其(その)又山(またやま)あるじの朋友(ともだち)に佐野(さの)喜内(きない)と号(いふ)人(ひと)がこし

らへさのごゞに居(くせつ)して思(おも)ひせぶりの陽睡(そらね)といふツラ

八幡(はちまん)が母のうへ唄(うた)ごヨ己(おのれ)が讒(ゑんき)でせらさう

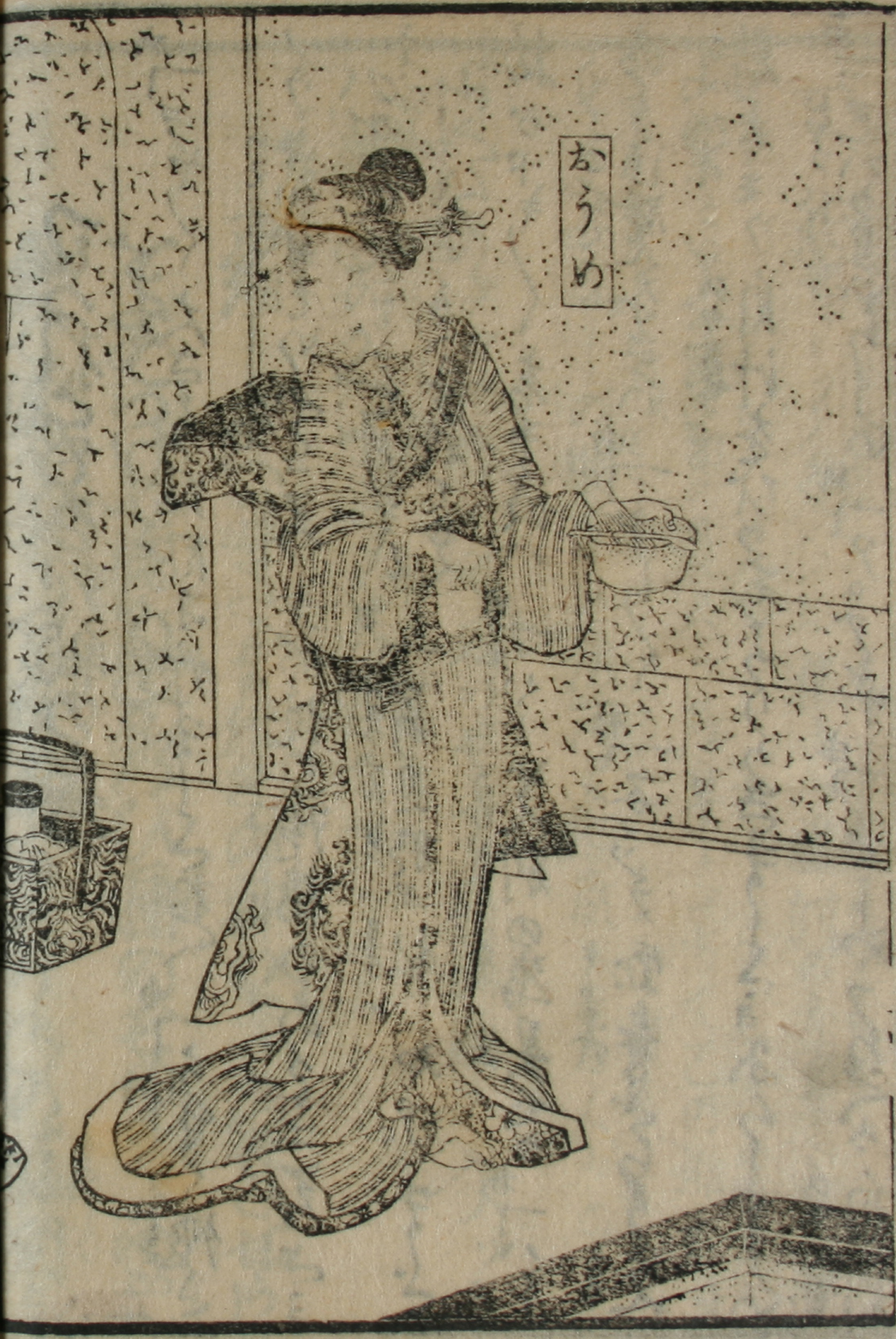
「縁しさへ譲(よう)ますがの[illegible]の[illegible](つく)まぐこう[illegible](あけ)しせらに

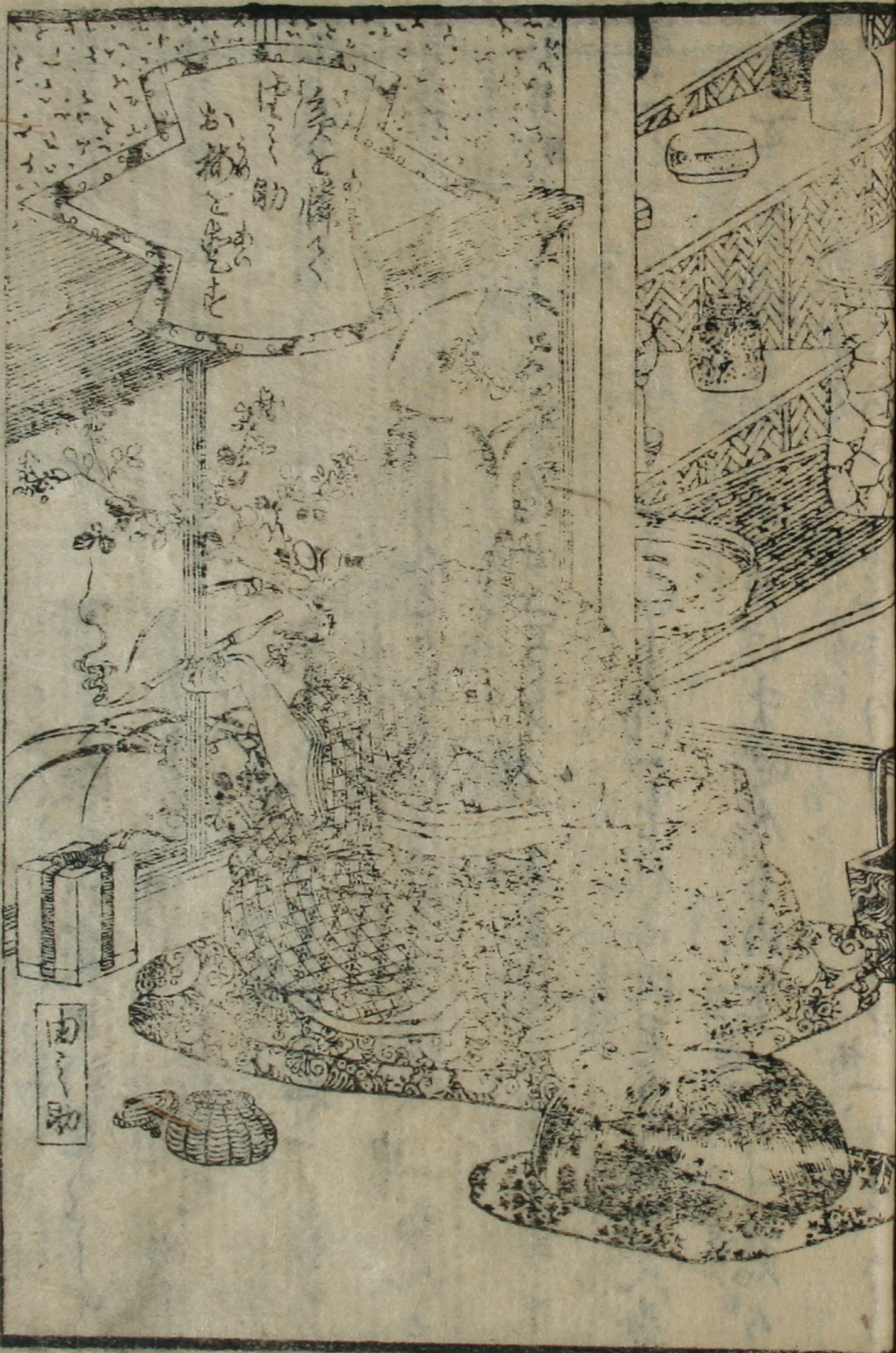
をそつけて[illegible]とあびも[illegible](ね)のそのまゝふ乱(こく)

ましく濡(ぬれ)るまゝて[illegible](ぐくわさ)とうゆの婚姻(きぬぐ)

早れを見た袖（そで）の露

梅「ヨウヤく詠（えい）さう粋（いき）な作（でき）ましたね 由「うまく出来（でき）こノウ岩打（いそうつ）とゆふところを鶴扱（あうち）の鴇橋（ときのくも）のあるところでヨトこのうたもおちてもうてくあまつひやかましい誘へし川てやく 梅「紅蓮（こうぜん）羽又私（わたし）やアまぁ胸（むね）がドキく志ましたハ 由「ハゝせん朝（さうき）の鶏鳴（ちうまで）でた 梅「ハゝあゝ歯欄（でらん）あるさく 由「ドレく 梅「子ゝソラ雲も掌（まかした）ろうさん（さう）朝（き）もてモウ冷汗（ひやあせ）をびツしよりかきましたヨホウくし 由「己（おのれ）ハうつゝらもりの 梅「ア。アレサ 由「イ、ヽやアねくろ冷汗（ひやあせ）


おうめ


後を慕ふて
傳之助
お綾を逃さむ
国貞画

だろうが、しかし気(き)の毒(どく)ざゝ此度(こんど)ハ実(ほんと)の汗(あせ)をかいて
やらうと思(おも)ツてヨどゑどト（ゐらぶのところ　とちよゐとつく）梅「てそれでも　由「
それでもあんまり嫌(いや)なよさうろ　梅「コレ嫌(いや)じやアあり
ません。お子お三(さん)どんがなんとおもひませう稀く　由「なんと
おめへても宜(い)やうな老女(としより)ござう　梅「それでも私(わたし)じやア
まアとお前(まへ)が悪(わる)うござりますハそれに此間(こないだ)からいろんな
ことを云(いつ)て私(わたし)を嬲(なぶ)ツていけませんものを　由「ハヽ然(さう)か
彼女(あつや)ア気(き)が若(わけ)へから老女(としより)らしく無(な)へウ　梅「イヽ、みんなさう

あまり光女と申スほどじやアありません子　由「ナニさうでもねへ　梅「それでも子ヽ（ろうつて　ねうろ）　由「何(なに)をてらふのさ　梅「てかういふことがありますヨ　由「なんぞ可笑(おかし)いこともひとりで承知(せうち)してゐるだろうじやア解(わから)ねへ　梅「アノ子のアノウおきんどんも光君(おゝきみ)に惚(ほれ)きつてゐますヨ　由「ハヽヽなんざナぞうぞ、云(いゝ)ねへ　梅「イ、ヱまでも此比(このごろ)光君(おゝきみ)がお風邪(かぜ)を召(め)てお臥(やす)みなさいました時(とき)もアノ大師(だいし)さまへお茶(ちや)だちをあまして[illegible]ハ、モウどんなに氣(き)を付(つけ)て

痼病（こんびよう）のいましいらの毒ハござりません実（じつ）がありますにねく、それごろ可愛（かあい）がりてお金をあけさしまし、ちやホヽ

由「うそらい、さうちやアないと云（いひ）なさんな、よそ〳〵しい

梅「それでも実（ほんとう）なんでござりますものを、それだのに此比（このごろ）じやア遠（うげ）でうとさくらしふ、どんなよふか案（おやう）ませう、私（わたし）しやアもう気（き）の毒（どく）でありませんハ

由「つまらねへことを云（いひ）ねへ、おもしろくもねへ

梅「浮まのくらあうテありませんヨ、あんなふに思（かお）て居（ゐ）まするのを、可愛（かあい）がりておやんなさへましなと（くゝろのなぞる男のかほをのぞく）

由「フン

今はげんにお志給「アヽモウ艶歌をといふと引く三挺「ア。

ツレヽもぐッとこゝらござりません　由「いつまでも鳴る三絃に聲ッ

こゞるめのろあるめのろツレ見んなに艶歌にしてあるらすかに

ト弾く行伊黙の折節天井の鼠がゴソ〳〵

下女「アヽモウそぞろでならぬ亥刻ござらふトレ寐仕らくでも

志ませうトヽ立あがり志の火鉢の火をモウ消しても

よろしうらうトいふ所に「アヽイヨト返事する声

寝さへ息のたえ〴〵に筆先もそゞむ作者が気を…て

巻(まき)を接(つぎ)木の連りの梅暦(うめごよみ)むすびてなが〱に重編してを

より色梅由之助(よしのすけ)の恋しく和合(わがう)故障(こしやう)もなく。女夫(めうと)に為るに

なる事を収む団(うつ)なる雪(ゆき)といふ繊綬の著を採て房(ふさ)二郎に

お粂の縁を如何ぞまくる事を是紅露と綴を

三編(さんぺん)已に編に著し。続(つゞ)て出板(しゆつぱん)せしに。あまた十方の看官(ごけんぶつ)

殊さらに梅暮爺(さくしや)なとゝ言(こと)を取上(とりあげ)ありけれ。相(あい)も不替(かはらず)

御贔屓(ごひいき)の愛顧(あいきやう)あらせたまひねかし

春色連理梅巻之六畢

神・元町二丁目[illegible]
BOOK
書籍所
川辺安兵衛